

研究ノート

ジャン=ジャック・ルソーにおけるコミュニケーションの主体の形成

妹尾 剛 光

Jean-Jacques Rousseau: the Development of an Agent of Communication

Goko SENO

Abstract

Through an examination of Rousseau's principal works, this paper essays to elucidate the development of an agent of communication in his personal history. It is suggested that the fundamental problem that affected this, which is here argued to have resulted from his experience of having grown up deprived of mother love, was his yearning for direct, unmediated communication, or "companionship as intimate as possible", and that this longing led him to take the view that, having such a desire at the core, the human heart could only be fundamentally good, and therefore that whatever evil children might in fact be capable of must have its origin in evil exerted by adults, or by society. Innocent as long as he is still left in solitude, man is forced, by the development of technology, to take a place in society, which Rousseau viewed as nothing but a system of dependency or obedience. Thus, prior to his composition of *Émile*, Rousseau had not yet arrived at an idea of society as a community composed of mature agents of communication; on the other hand, through his writing of *Du Contrat Social* and *Émile*, he arrived at a view of man and society that fundamentally echoes those of Locke and Smith.

Key words: Jean-Jacques Rousseau, agent of communication, man and society, unmediated communication, John Locke, Adam Smith.

抄 録

小論は、ルソーにおけるコミュニケーションの主体の形成とそこにある基本的問題点、即ち、母の愛を知らずに育ったルソーの直接的コミュニケーション、「心の底からの親しい交わり」への強い欲求は、この欲求を核とする人間の本心を善、社会あるいは大人の悪を子どもの悪の原因とする人間観、及び、これと結びついた、汚れを知らない孤独の中の人間は、技術の発展とともに依存、服従関係でしかない社会に入らざるをえないという社会観をルソーに持たせ、人間がコミュニケーションの主体に成熟して作る社会を、『エミール』以前にはルソーに考えさせなかったということ、更には、それにもかかわらず、『社会契約論』、『エミール』においてルソーはロックやスミスと基本的なところでは同じ人間論、社会論に辿り着いたということ、彼の主要著作の検討を通して明らかにする。

キーワード：ジャン=ジャック・ルソー、コミュニケーションの主体、人間と社会、直接的コミュニケーション、ジョン・ロック、アダム・スミス。

ジャン＝ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseauは、1712年6月28日ジュネーヴ共和国で生まれたが、その直後、母は産褥熱でなくなった。時計職人であった父の家庭を父の妹の一人が助けた。ジャン＝ジャックには七つ年上の兄がいたが、人々の愛情は弟に注がれ、兄は早くから道楽の習慣を身につけ、やがて家出して消息を絶った。こうしてジャン＝ジャックは、事実上一人息子として甘やかされて育った。

しかし、1722年父は退職軍人と喧嘩をし、相手に告発されて投獄されそうになり、ジュネーヴを去った。残されたジャン＝ジャックは母の弟ベルナルが後見人となって、二年間ボセーのランベルシエ牧師の家に預けられた後、1725年5月彫金細工師デユコマンの許に徒弟奉公に出された。この時ほど「子としての依存と奴隷としての隷属との違い」を教えられたことはないとルソーは書いている。「親方の圧制〔束縛や虐待〕のために、好きになれたであろう仕事が耐えがたくなり、嘘や怠けや盗みといった、そういうことがなければわたしが憎んだであろう悪習に染まっていった。」

こうして十代半ばのルソーには、表面は、他人の顔色を窺うこと甚だしく、恥ずかしがり、本心を基にしたコミュニケーションができない、しかし、本心では、他人との直接的コミュニケーション、「心の底からの親しい交わり」を求める衝動にとりつかれた人間が作られていった。しかもルソーは、このような体験を受けとめて、直接的コミュニケーションへの欲求を核とした人間の本心は「善良な」「罪のない」ものであり、子どもに悪への第一歩を踏み出させるものは、社会あるいは大人の悪であると考えようになった。

ルソーのこの「心の底からの親しい交わり」を求める心の核には、ルソーが経験することのなかった「母の愛」への執心があったと言える。それはルソーの根底に、恐らくは死に至るまで生き続けた強烈な情念であったが故に、その持つ「自律を阻む依存」とそれに伴う問題点をルソーに見させなかった。後に、ルソーは「心の底からの親しい交わり」が満たされない友人に対し、不誠実、裏切と非難し、それは相手の人間にルソーに対する不信感を植えつけて人間関係を更に悪くするという悪循環が繰り返されて、ルソーはやがて「多くの人々は自分を中傷し、徹底的に破滅させようとしている、しかし、自分にはその陰謀の全体が見渡せない」と思う被害妄想に陥ることになる。

1728年3月、郊外に遊びに出て市の閉門時刻に遅れたルソーは、二度と親方の許に帰らないことを決意し、故郷を棄てた。放浪の中で紹介されてアヌシーで出会ったヴァランス夫人（1699年スイスのヴヴェで貴族の娘として生まれ、1713年ヴァランス男爵と結婚したが、1726年家出、サヴォワのヴィットリオ・アマデオ王に保護と年金を求めて受け入れられ、同年アヌシーでカトリックに改宗、1762年死去）に一目で引きつけられる。しかし、

ルソーはヴァランス夫人に何よりも母を見出していた。彼女の紹介でトリノの「改宗者教育のための救済院」に入り、カトリックに改宗した後、しばらくは町で生計のための仕事をしてしたが、1729年夏ヴァランス夫人の家に行き、彼女はルソーに一室を与えて住ませ、「ママン」「坊や」と呼びあう仲になった。既に愛人を持っていたヴァランス夫人は、1733年ルソーを誘惑して愛人とした。以前からの愛人はやがて死に、「生涯の最高の幸福の時」ルソーは哲学、数学、ラテン語などの勉強に打ちこむことになる。しかし、ヴァランス夫人は1738年には別の男を愛人としており、ルソーは冷たくあしらわれる。1742年ルソーは新しい生活を求めて、パリに来る。

パリでルソーは哲学者デイドロや社交界のデュパン夫人らと知り合いになった他、1745年には、自分の泊っているホテルに働きに来ていたテレーズ・ルヴァスール (1721-1801) と関係を持つ。ルソーは前もって、彼女を棄てはしないが結婚もしないだろうと言っていたが、1768年正式に結婚した。テレーズは「感じやすい、素朴で、媚びのない娘」、「愛情深く、誠実であった」、書くことはまずまずできたけれども、しかし、読むことは十分にはできなかった、数字を覚えず、金の勘定ができず、時計の読み方がわからなかった、とルソーは書いている。

ルソーは、彼女との間に生まれてきた五人の子どもをすべて、捨子養育院の前に捨てさせた。後にルソーは、このことで慰められることのない悔いの思いに衝き動かされる。このことについてルソーは、「私は、子どもたちを自分の手で育てるだけの資力ががないので、子どもたちを公けの施設の教育に託して、ベテン師や山師になるよりも労働者や百姓になるようにしておけば、市民としてまた父親としての行為をしているのだと信じており、自分はプラトンの国家の一員であると考えていた。その時以来一度ならず心に起こった後悔は、私が間違っていたと私に教えた。」私は間違っていた、しかし、「冷酷無情な人間、人道にもとる父親」ではなかった、と書いている。後にはまた、テレーズの母親や家族の悪徳が子どもたちに及ぶことを避けるためであった、とも書いている。このことは、人間は、自然のままでは、悔い改めによる再生がなければ、自分が愛されたように愛するのであるということを示していると思われる。

1745年オペラ『優美な詩の女神たち』を完成させ、これは成功しなかったが、ディジョンのアカデミーの1750年度懸賞論文 (テーマ「学問・芸術の進歩は習俗を堕落させたか、それとも純化させたか」) に応募した彼の論文は受賞し、ルソーは一躍有名になった。

『学問・芸術論』(1750) でルソーは、「飾りをつけないありのままの姿」「生まれながらの自由」「徳、義務、信仰」が支配する「自然の世界」と、「互いに気に入ろうとする欲望」

に動かされて「慣習、礼儀作法」に隷従し「徳がないのにあるかのような見せかけ」「贅沢、魂の腐敗」が支配している「学問、芸術が作った世界」とを対比して、「自然の世界」を誉め讃えた。この考えは、上述の十代のルソーの人間像、人間観と密接に対応している。「自然の世界」では、「飾りをつけないありのままの姿」「生まれながらの自由」と「徳、義務、信仰」という矛盾するものが矛盾と自覚されずに結び合わされている。この後ルソーは、この論文の趣旨にそって、「人々の判断をいささかも気かけずに、ただ自分によしと思われることだけを敢然と行なうことに、魂の全力を注いだ。」

オペラ『村の占師』（1752）は非常に成功し、国王拝謁、年金下賜の申入れがあったけれども、ルソーは「年金による束縛、へつらい」に陥らず、「真理、自由、勇気」を持ち続けるために、これを断った。1754年には『人間不平等起原論』をディジョンのアカデミーに提出したが、これは落選。

翌年出版されたこの論文で、ルソーは人間の自然状態と社会状態とを対置して、次のように論じた。

本能のままに生きる自然状態での人間は、「憐れみの情 *pitié*」は持っているけれども、孤立して「自己愛 *amour de soi-même*」に従い、自己保存を行なうだけであって、相互に人間関係がないから、善も悪もありえず、徳も悪徳もなかった。しかし、技術の発展とともに、人間は他人の助けを必要とするようになり、ここに人間間の依存、服従関係が成立する。土地の私有とともに、人間には他人を凌駕しようとする野心、即ち、「自尊心 *amour propre*」が生まれ、自分の利益のためにありのままの自分とは違う自分を他人に示そうとし、また、他人を犠牲にして自分の利益を得ようとする欲望が生まれる。こうして社会は戦争状態となり、特に損害が大きい富者は政治社会の設立を提案し、人々はこれを受け入れて、社会と法律を、従ってまた「富者と貧者」を確立した。やがて、公権力を委託される者としての為政者が作られて、「強者と弱者」が確立され、為政者はやがて世襲化して恣意の権力となり、力だけが支配する不平等の最後の段階、「支配者と奴隷」の状態に辿り着く。これはもはや自然状態に他ならない。

ルソーは『人間不平等起原論』では、自然状態では人間関係がなく、従って、義務も、徳、悪徳もないとして、『学問・芸術論』にあった、「飾りをつけないありのままの姿」「生まれながらの自由」と「徳、義務、信仰」とが結びついた「自然の世界」という明白な矛盾を取り除いている。しかし、『人間不平等起原論』での基本的な考え——各人が孤立してそれぞれに自己保存を行なう自然状態では、それぞれの人間の中で自己保存を行なうだけの「自己愛」が働き、人間関係が成立すると「自尊心」が働く、しかも人間関係は「技術

の発展」という人間の外の要因に基づいて成立するという考え、言い換えれば、人間のあり方の根本は環境が変わることによって変るという考え——は、自然状態の人間が人間関係の中でコミュニケーションの主体として内面的に社会的人間に成長してゆく過程を全く考えていない。こうして『人間不平等起原論』では、それぞれの人間の内に基盤を持ったコミュニケーションの主体の確立が考えられていないから、社会における人間関係は、依存、服従の関係、不平等の関係でしかないと考えられることになる。この考えの根底には、コミュニケーションの主体形成以前の直接的コミュニケーションを人間本来のコミュニケーションとする、ルソーの初期の考えが依然としてあったと言える。しかし、ルソーは『エミール』では、これとは対照的な、より成熟した考えに辿り着いている。

『人間不平等起原論』に対するジュネーヴの人々の反応は好意的なものではなかった。プロテスタントに改宗し、故郷ジュネーヴに住もうと考えていたルソーは、これを断念し、1756年パリ郊外のモンモランシの森の近くにあるデピネ夫人所有の家に住み、夫人と仲違いして家の立ち退きを要求された後は近くの別の家に移って、著作活動を精力的に推し進めた。この間デイドロとも完全な絶交状態となる。1761年『新エロイズ』、1762年『社会契約論』、『エミール』を出版。

『エミール』は、ルソー自身をエミールという男の子の家庭教師とし、その子の誕生から結婚(23-24才)までを五つの時期に区切って、それぞれの時期に行なわれるべき教育のあり方について論じている。それはルソー自身が現実に受けた教育とは全く違うものであった。五つの時期を貫く教育の基本的な原理は、子どもがそれぞれの時期に自然によって与えられる力を十分に使って成長するように配慮するということである。これは、人間の力では左右できない人間の自然に従うようにするということであって、大人の気まぐれに従わせたり、子どものいいなりになることとは違う。後者は、支配と服従の観念を生み出し、自尊心を引きおこす。従って、教育の目標は、自然人であると同時に社会人である人間を作り出すことである。

エミールが結婚して大人になる前に最後に学ぶべきことは、『社会契約論』に書かれた、政治社会のあるべき原理、その真の基礎である。良心と理性によって心の奥底に書きつけられている「自然と秩序の永遠の法」が存在する。その核心は、「[個々人の利己的な] 特殊意志 *volonté particuliere* の総和」である「全体意志 *volonté de tous*」ではなくて、「個々人のさまざまな特殊利益の中にある共通なもの」である「一般意志 *volonté générale*」に、社会契約を基に従うということである。それは、自然状態における無制限の自由、自然的自由ではなくて、社会的自由を作り出す。

『エミール』では、人間の自然状態と社会状態とを対照的な性格のものとする『人間不平等起原論』での考えはなお生き続けている。しかし、この考えは、『エミール』では、その基調である上述の人間形成論、社会論に組み込まれている。この『エミール』の人間形成論、社会論は、自然法を基にしたコミュニケーションの主体の形成、社会形成を考えたロックやスミスの考えと、ロックやスミスの経験論に対してルソーの場合は理論が勝っているけれども、考えの基本において一致している。

『エミール』第四篇に「サヴォワの助任司祭の信仰告白」として書かれたルソーの宗教論——宗教は自然宗教で十分であり、理性と良心が見出すことができる信仰と自然法（その要点は、何にもまして神を愛し、自分の隣人を自分と同じように愛するというのである）を信じ、行なうことで十分である。啓示は、人間が欲することを神に語らせたこと、人間が作り出した信仰である。その結果、世界にはさまざまな啓示があり、啓示を受けたと思う人間は、自分の宗教こそ唯一の真実の宗教だと信じている。啓示に基づく教義は、「人間を傲慢に、不寛容に、残酷にし、地上に平和を打ち立てるところか、剣と火をもたらす」。神が求める信仰は「心の信仰」であり、神が求める礼拝は心から真実に神を崇拝することである。真の宗教は、人間の制度に基づくものではない。外面的な礼拝はよき秩序を保つためのものであり、礼拝の統一は純粹に治安の問題にすぎない。——は、カトリック教会はもちろん、プロテスタントの教会も黙認することができない考えであった。

5月27日『エミール』が発売されると、6月5日警察による押収、7日ソルボンヌによる告発があり、9日にはパリ高等法院が発禁、焚書、著者逮捕を決定した。ルソーは9日午後テレーズとも別れて、モンモランシを発ち、イヴェルドンの旧友ロガン宅に行く。6月19日ジュネーヴで『エミール』と『社会契約論』焚書の宣告、同日実施、著者逮捕令状が出される。6月23日オランダでも『エミール』販売差押命令。7月1日ベルヌ政府はルソーに領内からの退去を命じ、9日ルソーはイヴェルドンを発ち、プロテスタントのプロイセン国王領モチエのロガンの娘の持ち家に行く。20日テレーズがここに来る。国王フリードリヒ2世はルソーに滞在許可を与える。8月28日パリ大司教クリストフ・ド・ボーモン『エミール』断罪の教書公刊。9月9日教皇庁『エミール』焚書。1764年ヴォルテール、匿名小冊子『市民の意見』でルソーの捨て子を暴露、「淫売婦を連れて歩いている、放蕩にやつれ、梅毒で腐りはてている」などとルソーを中傷。

1765年モチエの牧師は説教の中でルソーを「キリストの敵」と非難し、村民はそれに応えて、道を歩くルソーに嘲笑、軽蔑の言葉を浴びせ、小石を投げつけるなどいやがらせをしていたが、9月1日深夜には、家の窓や扉に石を投げつけ、窓を破った石はルソーに当

りそうになった。暴動を抑えることができない村の有力者たちは、ルソーに教区一時退去を要請、9日ルソーは村を出る。以後ルソーは各地を転々とする。あるところでは公的な立ち退き命令が出され、また、自分に好意を持ち、援助の尽力をしてくれた人々の誠実を被害妄想によって疑い、彼等の不信と非難を受ける。その間『告白』、『ルソー、ジャン=ジャックを裁く 対話』、『孤独な散歩者の夢想』などを書く。

絶筆となった『孤独な散歩者の夢想』でルソーは、「こうしてわたしは地上でたった一人になってしまった。もう兄弟も、隣人も、友人もいない。自分自身のほかにはともに語る相手もない。だれよりも人と親しみやすい、人なつこい人間でありながら、万人一致の申合せで人間仲間から追い出されてしまった。人々は憎悪の刃をとぎすまして、どんな苦しめ方をしたら感じやすいわたしの魂にこの上なく残酷な苦痛を与えることができようかと思ひめぐらしたすえに、わたしをかれらに結びつけていた一切の絆を荒々しく断ち切ってしまった。」「人々にもっとよくわかってもらえたらという願いは、わたしの心から消えてしまった」と書き、孤独の中で自分を省みて、「不羈独立を好む天性」の故に自分は「市民社会にふさわしい人間ではなかった」などと自分の弱さ、至らなさを認めるとともに、それにもかかわらず孤独の中で充足して生きる自分を「実を結ばなかったとはいえ、よき意図の貢物を、何の役にもたたなかったとはいえ、健全な感情の貢物を、また人々の侮辱という試練に堪えた忍耐力の貢物を携えて〔神の許に〕ゆく。」などと書いている。このことは、その静謐な筆致と併せて、『エミール』で明確に確立したコミュニケーションの主体としてのルソーが、その後の更なる試練の中で、若い時に身につけた人間のあり方を持ち続けながらも、また、強い被害妄想に陥り、人間の弱さを諸にさらけ出しながらも、核心において崩壊せず、死に至るまでゆるぎなく生き続けたことを示している。

1778年7月2日テレーズが看護する中、卒中で死去。

小論は、1984年6月21日吹田市民大学教養講座での講演要旨を基に、今回大幅に加筆修正したものである。講演の時には岩波文庫にあった邦訳に拠り、今回は白水社の『ルソー全集』とPléiade版全集を参照して、改めるべきところを改めた。